県道関係埋蔵文化財発掘調査報告

村黒遺跡

積浦遺跡

平成15年３月

香川県教育委員会

例言

1．本書は県道黒潮本大線地方特定道路整備事業（村黒遺跡）と、県道北風戸積浦線離島道路特殊改良第一種事業（積浦遺跡）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．村黒遺跡の所在地は観音寺市流岡町・村黒町、積浦遺跡の所在地は香川郡直島町積浦である。

3．調査は、香川県教育委員会が実施し、文化行政課文化財専門員佐藤竜馬が担当した。

4．本書挿図中の標高は海抜（T.P.）、方位は村黒遺跡は真北、積浦遺跡は磁北である。

5．挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「観音寺」「宇野」「豊島」を使用した。

6．出土遺物・図面は香川県教育委員会が保管し、坂出市府中町字南谷5001-4　香川県埋蔵文化財センターにて収蔵している。

本文目次

第１部　村黒遺跡の発掘調査
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2
第３章　調査の成果
　第１節　調査区と層序 …… 7
　第２節　遺構 …… 8
　第３節　遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 11

第２部　積浦遺跡の発掘調査
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 17
第２章　遺跡の立地と環境 …… 18
第３章　調査の成果
　第１節　調査区 …… 20
　第２節　層序と地形 …… 20
　第３節　遺構 …… 25
　第４節　遺物 …… 28
第４章　まとめ
　第１節　遺構の時期・形成過程 …… 36
　第２節　遺構の構造 …… 37
　第３節　中世土器の様相 …… 38

挿図目次

第１図　村黒遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 3～4
第３図　調査区平面図 …… 5～6
第４図　土層柱状図 …… 7
第５図　検出遺構平・断面図 …… 8
第６図　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物 …… 9
第７図　ｂ地点採集遺物 …… 12
第８図　ａ地点出土遺物 …… 13
第９図　村黒遺跡の内容と地形 …… 13
第10図　高橋邦彦氏の調査記録 …… 15
第11図　積浦遺跡と直島 …… 19
第12図　積浦周辺地形図と調査区 …… 21～22
第13図　①区西壁土層図 …… 23
第14図　遺構配置図 …… 24
第15図　ＳＸ01 …… 25
第16図　ＳＸ01 …… 26
第17図　ＳＸ01－ｂ、ＳＸ02 …… 27
第18図　①区ＳＸ01関連出土遺物 …… 29
第19図　ＳＸ03礫敷き出土遺物 …… 31
第20図　Ⅵａ・Ⅴ・Ⅳａ層出土遺物 …… 32
第21図　②区ＳＸ01関連出土遺物、表採遺物 …… 33

表目次

表１　土器組成表 …… 34

写真目次

写真１　Ⅰ区出土須恵器 …… 10
写真２　Ⅰ区出土須恵器 …… 10
写真３　Ⅰ区出土土師器 …… 10
写真４　Ⅱ区出土青磁 …… 10
写真５　Ⅰ区検出遺構 …… 16
写真６　Ⅰ区検出遺構 …… 16
写真７　Ⅲ－①区検出遺構 …… 16
写真８　Ⅲ－①区検出遺構（SD02） … 16
写真９　Ⅲ－①区検出遺構（SD02） … 16
写真10　Ⅲ－②区全景 …… 16
写真11　Ⅲ－②区全景 …… 16
写真12　Ⅲ区北側での谷部断面 …… 16
写真13　積浦遺跡全景 …… 17
写真14　崇徳天皇神社から調査地を見る …… 17
写真15　①区全景 …… 35
写真16　②区全景 …… 35
写真17　①区ＳＸ01 …… 39
写真18　①区ＳＸ01前面土層 …… 39
写真19　①区ＳＸ01 …… 39
写真20　②区ＳＸ01・02 …… 39
写真21　②区ＳＸ01 …… 39
写真23　②区ＳＸ01－ａ・ｂ石積み状況 …… 39
写真24　②区ＳＸ01－ｂ・１期石積み …… 39
写真25　ＳＸ03検出状況 …… 40
写真26　ＳＸ03礫敷き …… 40
写真27　ＳＸ03遺物出土状況 …… 40
写真28　出土遺物 …… 40
写真29　出土遺物 …… 40
写真30　出土遺物 …… 40
写真31　出土遺物 …… 40
写真32　出土遺物 …… 40

第１部　村黒遺跡の発掘調査

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

村黒遺跡は、戦後間もなく水田の地下げ（粘土採掘）に伴い発見された遺跡である。遺跡の所在する丘陵は、大正期の予讃線の敷設、太平洋戦争中の道路新設（現在の県道黒潮本大線）によって削平されていたが、その際には遺跡の存在は認識されるに至らなかった。

ようやく戦後の粘土採掘に際して、高橋邦彦氏（香川県文化財専門委員・当時）が遺構・遺物の存在を確認したことで、遺跡の所在が明らかになったのである。高橋氏による調査は粘土採掘範囲の約1,400㎡前後を対象に半年程度行われ、竪穴住居・掘立柱建物が検出された（観音寺市教育委員会1962）。詳細な調査地点は不明だが、『観音寺市誌』の記述を参考にするとⅡ～Ⅲ区の北側で県道と線路の間の範囲と推測される（第２図ａ地点）。

その後、県道黒潮本大線の沿線は開発が進み、昭和57年には店舗工事中に弥生土器・韓式系土器・陶質土器・須恵器などが出土した（観音寺市流岡町128－４番地：第２図ｂ地点）。その際の採集資料の一部については、図示・報告されている（岩橋1983・松本1987）。

昭和63年度からは、県道黒潮本大線の拡幅計画が香川県土木部道路課から示され、村遺跡については削平を免れた台地部で試掘調査を行う方向で協議が進められた。平成３年度には用地買収が一部終了したため、平成３年12月10日、平成４年１月６日の２日間で掘調査が行われた。その結果、観音寺市村黒町242－１番地、流岡町130－１・３番地の約32㎡を対象として本調査を行うこととなった。実掘面積は120㎡で、調査期間は平成４年１月29日～31日の３日間である（Ⅰ区：調査担当岩橋　孝）。

平成４年２月２日には、第２次調査区に隣接する流岡町132－１番地（78.5㎡）において、県道黒潮本大線道路改良工事に伴う擁壁工事が行われた。しかし当該箇所は、事前協議で保護措置の必要な範囲として合意していた地点であり、未調査で工事着手したことになる。

香川県教育委員会では、平成４年６月１日に現地を確認し、香川県土木部観音寺土木事務所に対して、工事の経緯の説明を求めた。観音寺土木事務所ではこれを承けて、平成４年６月23日付で文化行政課長宛に状況説明を行い、今後かかることないように協議にもとづき連絡・調整を行うことを確認した。

平成４年９月17・18日には、村黒町229－１番地、231－２番地、232－４番地の約370㎡を対象に試掘調査を行った。その結果、229－１番地においてピット３個・土坑２基を検出し、61㎡を本調査対象とした。本調査は９月28日～30日で行われた（Ⅱ区：調査担当北山健一郎）。

平成14年４月には、県道黒潮本大線関係で最後まで残っていた流岡町129－３・５・10番地の用地買収が終了し、工事着手予定である旨の連絡を西讃土木事務所より受けた。現地を確認すると、129－３番地では既に路線外での地下げが行われており、法面には遺構の断面が露出している状態であった。遺構の存在が明らかなため、今回は試掘を行わず上記番地を対象として本調査を行うこととした。調査期間は平成14年４月30日～５月13日の実働５日間であった（Ⅲ区：調査担当佐藤竜馬）。

以上３次にわたる小範囲の本調査をもって、県道黒潮本大線地方特定道路整備事業に伴う村黒遺跡の発掘調査は終了した。なお調査区割・呼称は、第２図のように調査年次毎に行った。また発掘調査・整理作業にあたり、下記の方々の御教示・御協力をいただいた。

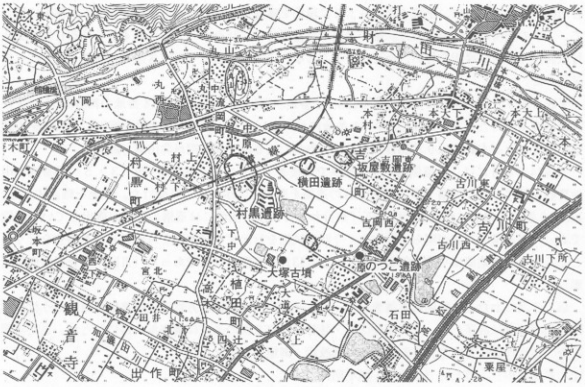
記して感謝申し上げたい（敬称略・順不同）。

松本敏三・松本和彦・松岡宏一・田村久雄・本田昌男・岡野雅子・瀬戸内海歴史民俗資料館

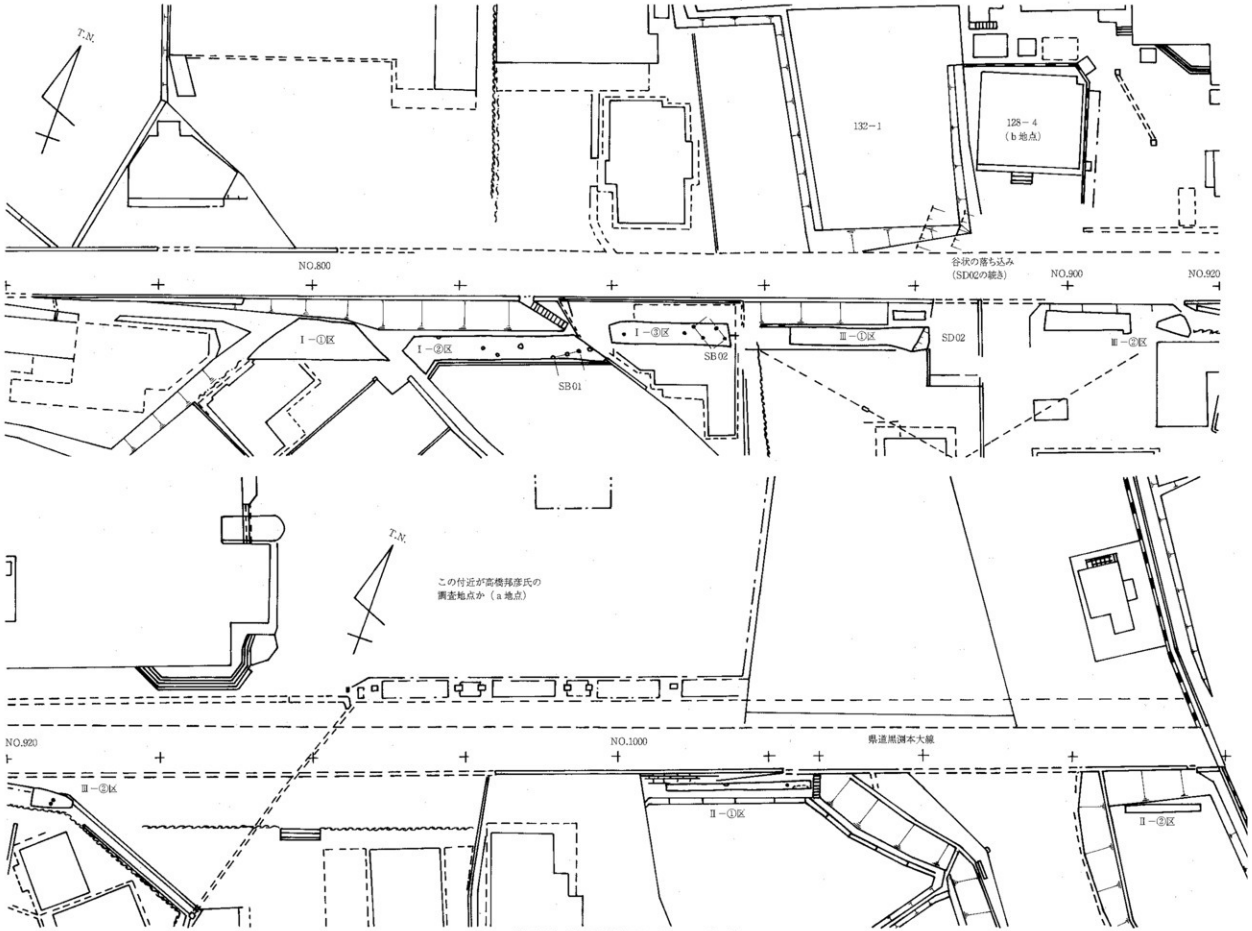
第２章　遺跡の立地と環境

財田川南岸の三豊平野南部は、阿讃山脈から派生する丘陵裾部に開ける。丘陵の末端には、母神山（標高92.1m）・丸山（標高35m）などの花崗岩からなる独立残丘も点在するが、頂部が幅広い台地状の丘陵地形が主体である。丘陵は花崗岩・礫層を基盤としており、微細な起伏のある表層に二次粘土層が形成されている。丘陵上面には現在田畑が広がるが、谷部との比高差は数mあるため、丘陵上に溜池などの水源を確保することが面的な耕地開発の前提であったと考えられる。同様な地形の大野原で近世前期に漸く新田開発が行われていることを考慮すると、今日的な景観は近世を遡るものではないと推測される。こうした特徴をもつ丘陵の一つで、善提山（標高312m）－新田町－石田を経て北西に延び、筆架池付近で北方に屈曲する丘陵（中原高地とも呼称される）の先端近くに、村黒遺跡は位置する。標高は、現況で９～10m前後であり、周辺の平地との比高差は２～３m前後である。周囲の平地部には、県道黒渕本大線より南側ではＮ－30°－Ｅの方向をもつ条里型地割が認められる。県道黒渕本大線より北側では、本大町本山橋付近から財田川およびそれと併走する一の谷川に伴う乱れた地割（旧河道）が連続しており、条里型地割との境には１m程度の崖が形成されている。これは、高橋学氏のいう完新世段丘Ⅰ面とⅡ面を画する段丘崖と考えられる。村黒遺跡の所在する丘陵は一の谷川に突き出しており、その接点に「船渡場」の地名が残る（観音寺市教育委員会1962）。また、やや北側の現・財田川では三豊平野北部を南流する竜川が合流している。本遺跡から約４km北側の竜川上流域には初期須恵器窯の宮山窯跡が所在しており、村黒遺跡との緊密な関係が想定されている（松本1982・岩橋1983）。

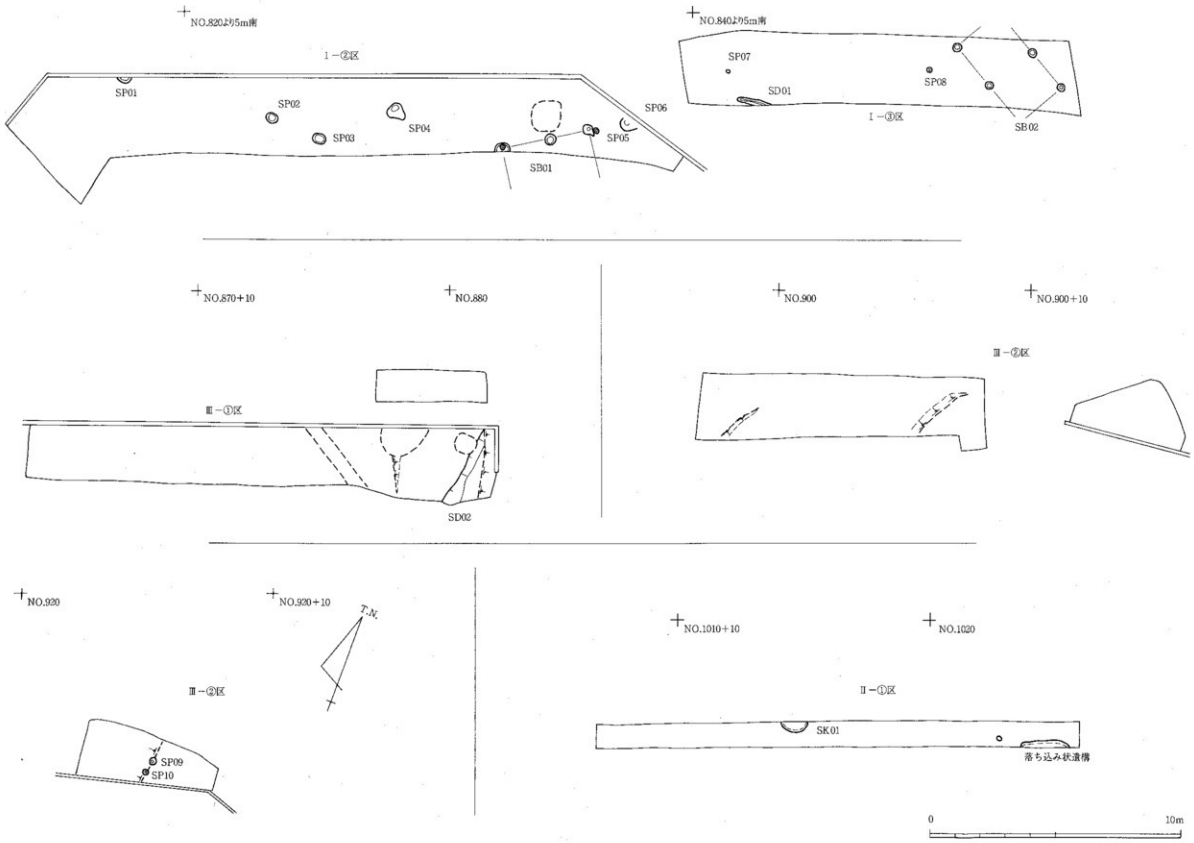
周辺の遺跡については、第１図を参照されたい。



第１図　村黒遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１／500）



第３図　調査区平面図（Ｓ＝１／150）

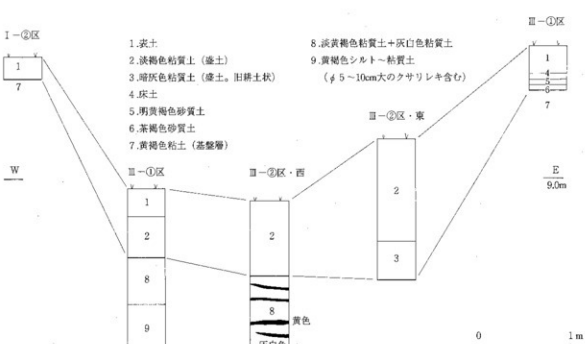
第３章　調査の成果

第１節　調査区と層序

県道黒渕本大線建設に伴う調査区を、調査年次順にⅠ～Ⅲ区と呼称する。また各調査区は地割により分割されるため、Ⅰ区はⅠ－①～③区、Ⅱ区はⅡ－①・②区、Ⅲ区はⅢ－①・②区に細分して報告する（第２図）。

各調査区と地形との関係をみると、現地表面ではⅢ区が最も低く標高9.0～9.3m前後であり、その西側のⅠ区が標高10.3～10.4m、東側のⅡ区が標高10.6～10.7mを測る。このことから、Ⅱ・Ⅲ区が丘陵部でⅢ区が谷部であることが窺えるが、周囲は宅地や店舗に伴う開発が進んでおり、微地形を復元することは困難である。大規模な削平を免れた線路北側の地形からみて、Ⅲ区から北方向に抜ける谷筋の存在が一応想定できる。

土層堆積状況（第４図）は、Ⅰ区では耕作土直下に粘性の強い黄色土（粗砂混じり）の基盤層が検出された。Ⅱ区においても耕作土直下が黄色粘土であった。Ⅲ区では造成土直下に基盤層が検出されており、Ⅲ－①区東半部では黄褐色粘土が基盤であるが、Ⅲ－①区西半部・Ⅲ－②区ではより下位の灰白色砂質土が基盤でその直下には風化の進んだ礫層（洪積層）が認められた。いずれの調査区でも旧地形の削平は顕著であるが、黄色粘土の検出範囲の削平は相対的に弱く、灰白色粘質土の検出部はかなり削平が強いことが推測できる。このことは、遺構が全て黄色粘土層上で検出されたことからも窺える。



第４図　土層柱状図（S＝１／40）

第２節　遺構

Ⅰ区（第３図）　Ⅰ－②区で掘立柱建物１棟、ピット６基が、Ⅰ－③区で掘立柱建物１棟、ピット２基、溝状遺構１条が検出された。Ⅰ－①区はⅠ区の最高所であったが、ブロック土を含む二次堆積層中より土器片が少量出土したのみで、遺構は認められなかった。

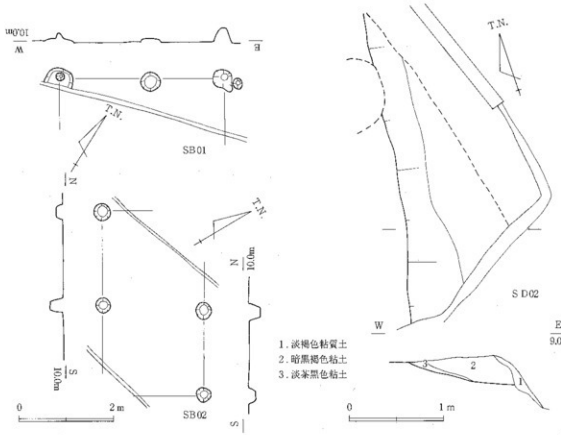
ＳＢ01（第５図）は、Ⅰ－②区東端部で検出された掘立柱建物である。Ｗ－32°－Ｓの方位で柱穴が３基並んでおり、掘立柱建物の梁間方向が検出された可能性がある。柱穴は0.4～0.5mの円形を呈しており、西端と東端の柱穴底面は柱痕状に１段下がっていた。埋土は黒褐色土である。

ＳＢ02（第５図）は、Ⅰ－③区東端で検出された掘立柱建物である。１×２間（2.15×3.9m）の規模をもつものとみられ、主軸方位はＮ－29°－Ｗで周辺の条里型地割に近い。柱穴埋土は黄灰褐色土であり、須恵器と土師器とみられる土器小片が数点出土した。

Ⅱ区（第３図）　Ⅱ－①区で土坑１基、落ち込み状遺構１基が検出された。

ＳＫ01（第３図）は、Ⅱ－①区中央部で検出された。直径1.0mを測り、平面円形、断面擂鉢形を呈する。埋土は３層に分けられ、上層は暗褐色粘質土、中層は暗黒灰色粘質土、下層は淡褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

落ち込み状遺構（第３図）は、Ⅱ－①区東端部で検出された。試掘調査時には複数の土坑・ピットが重複していると捉えたが、精査すると不整円形の浅い基盤層の落ちに暗茶黒色粘質土が堆積していることが判明した。遺物は須恵器小片が出土している。

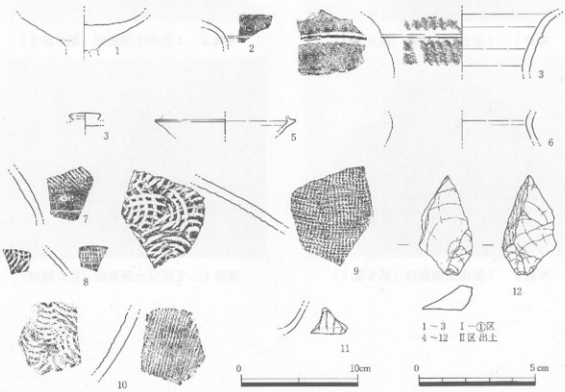


第５図　検出遺構平・断面図（建物はＳ＝１／80、溝はＳ＝１／40）

Ⅲ区（第３図）　Ⅲ－①区で溝状遺構１条が、またⅢ－②区でピット２基が検出された。

ＳＤ02（第５図）は、検出長3.4m、幅1.1m以上、深さ0.3mを測る。検出されたのは西肩部から底面にかけてであり、東肩部は既に削平されていた。断面形態は壁面が緩やかに傾斜しており、底面とは境界が不明瞭に連続する。また底面も緩やかに東に傾斜しており、最新部はより東側に存在したものと推測される。したがって本来の形状は、３m以上の幅をもつ緩い溝状の落ちと考えられ、明瞭な壁面（肩部）をもたないことから、人為的な遺構とみるよりも谷筋の一部と捉えた方がよいかもしれない。埋土は２層に分けられ、上層は暗黒褐色粘土、下層は淡茶黒色粘土である。いずれも下位基盤層に含まれるクサリ礫や大粒の石英を含む。遺物は全く出土しなかった。

ところで、Ⅲ－①区北側の路線北辺は平成４年２月に未調査のまま施工された箇所であるが、ここでは緩やかに東へ傾斜する黒色粘土層の存在が確認できる（写真12）。この落ち込みは幅４m以上とみられ、ＳＤ02の北側延長上に位置することから、同一遺構と捉えて大過ないであろう。さらに東隣のｂ地点北端（線路際）付近においても、店舗工事の際に谷状の落ち込みが確認されている（松本敏三氏御教示）ことから、ＳＤ02を最深部とする谷筋が北方向に連続していたことが窺える。



第６図　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物（Ｓ＝１／３。石器はＳ=２／３）

第３節　遺物（第６図）

遺物はⅠ・Ⅱ区で少量出土しているが、図示できるものは遺構から遊離した状態で出土したものである。またⅢ区では遺物は出土しなかった。

１～３はⅠ－①区出土遺物である。１は土師器高杯で、杯部上半を欠損するが内面の内弯状況からみて、底部から屈曲して直線的に延びる口縁をもつと考えられる。２は須恵器ハソウないし小型壺で、強く張った肩部に２条の沈線で文様帯を構成し、その間に波状文を施す。焼成は良好で器面は灰色、断面はセピア色を呈する。３は須恵器広口壺で、頸部中位に明瞭な突帯を付し、その上下に波状文を施す。焼成は良好だが、長石粒を多く含むやや砂質気味の胎土である。これらは初期須恵器とその共伴土師器と捉えられよう。

４～12はⅡ区出土遺物である。４は須恵器杯蓋のツマミで、８世紀の所産である。５は２・３よりも後出する５世紀末～６世紀前半頃の杯身である。６・８・９は６世紀頃の須恵器甕であろう。７・10の須恵器甕は、比較的細かな平行叩き目を施しており、５に近い時期の所産か。11は青磁碗Ⅱ－ａ類で、外面に細かく蓮弁文が片彫りされる。12はサヌカイト剥片である。

写真１　Ⅰ区出土須恵器（第６図３）

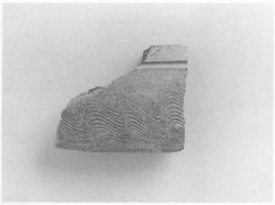


写真２　Ⅰ区出土須恵器（第６図２）

写真３　Ⅰ区出土須恵器（第６図１）

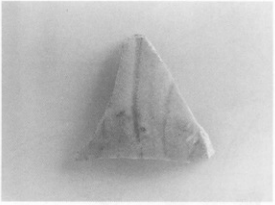


写真４　Ⅱ区出土須青磁（第６図11）

第4章　まとめ

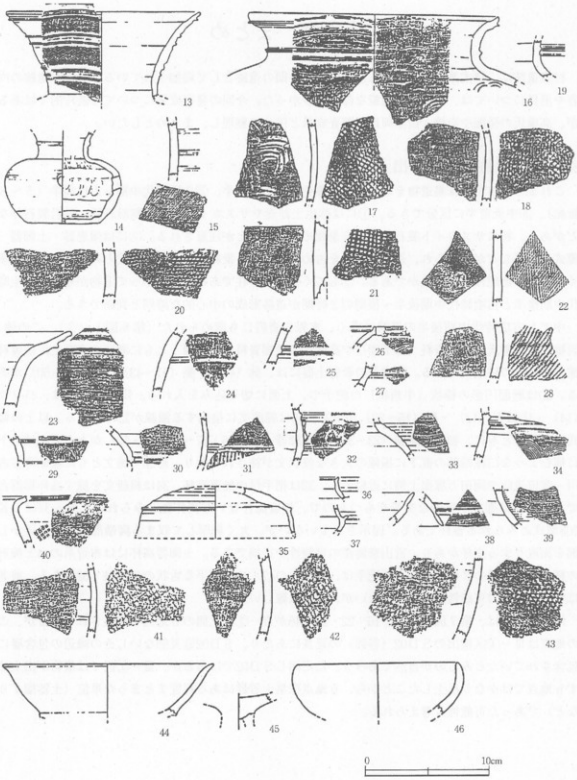
村黒遺跡は、韓式系土器を出土した古墳時代中期の遺跡として周知されている。しかし遺跡の内容や消長については、かなり不明瞭な部分が多かった。今回の発掘成果についても断片的ではあるが、高橋氏の発掘や岩橋・松本両氏の踏査成果と併せて整理し、まとめとしたい。

第1節　遺跡の時期と出土遺物

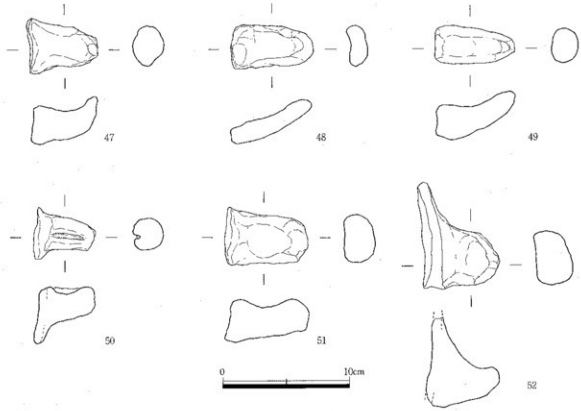
これまでの出土・採集遺物をみると、①弥生時代中期後半、②古墳時代中期～古代前半（5～8世紀）、③中世前半に区分できる。①には弥生土器壺やサヌカイト剥片・楔形石器、砂岩製石斧などがあり、特にサヌカイト製石器が一定量認められることが注意される。②には須恵器・土師器・韓式系土器などが認められ、遺物の主体を占める。特に5世紀後半～6世紀代とみられるものが多く、7・8世紀代はごく僅かである。③もごく僅かな存在である。したがって遺物からは、弥生時代中期後半と古墳時代中期後半～後期の2時期が遺跡形成の中心的な時期と判断できる。

中でも古墳時代中期後半の資料は多く、本報告資料にも認められた（第6図1～3）。この他、岩橋・松本両氏の採集資料（第7図）や高橋氏の発掘資料（第8図：ともに瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）もこの時期にあたる。韓式系の軟質土器には、鉢（40）・甕（41～43）・甑把手（50）がある。50は断面円形の棒状（牛角状）の把手で、上面に切り込みを入れる。陶質土器には、ハソウ（14）・広口壺（13）・甕（15～22）がある。15は縄席文に後出する圏線が認められる。以上の韓式系土器とともに、初期須恵器（23～39）や土師器（44～46・47～49・51・52）がある。26は上下に extended ような口縁端部の直下に振幅の大きな波状文が施されており、形態・施文ともに綾歌町佐古川・窪田遺跡や岡田万塚出土例に近似する。32は把手付の無蓋高杯、34は組紐文を施す高杯形器台である。38は細いが明瞭な突帯をもつもので、無蓋高杯ないし高杯蓋とみられる。35～37はＴＫ208型式とみられる蓋杯である。図示されていないが、丸く肥厚して収まる脚端部をもち、透かし部を面取りする高杯があり、宮山窯跡産の可能性が指摘できる。土師器高杯には布留系の44と椀形の杯部をもつ46の2者がある。甑把手は、牛角状の47・49と扁平な舌状の48・51・52がある。前者は韓式系土器の可能性も否定できないが、識別は難しい。

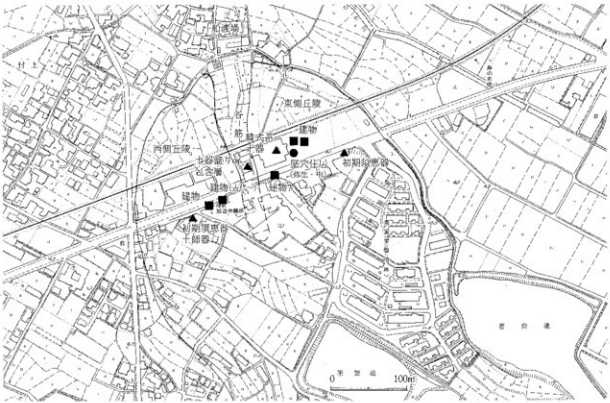
以上の土器は、第7図13・14・16～22・24～46がⅢ－②区北側のｂ地点で採集されているが、この地点はⅢ－①区検出のＳＤ02（谷部）の延長にあたり、ＳＤ02延長部ないしその縁辺の包含層に包含されていたとみるのが自然であろう。ただ同じＳＤ02ではあるが、Ⅲ－①区では遺物が出土せずｂ地点ではかなり出土したことから、ｂ地点採集土器群はある程度まとまった単位（土器溜まりなど）であった可能性も考えられる。



第７図　ｂ地点採集遺物（松本1987を引用：Ｓ＝１／３）



第８図　ａ地点出土遺物（Ｓ＝１／３）



第９図　村黒遺跡の内容と地形（Ｓ＝１／5,000）

第２節　遺構の分布と内容

Ⅰ～Ⅲ区で検出された遺構は、掘立柱建物２棟、ピット10基、土坑１基、落ち込み状遺構１基、溝状遺構２条である。遺構の時期を決定する材料に乏しいが、条里型地割にほぼ平行するＳＢ02は古代以降の可能性がある。これと異なる主軸で、より古い要素である黒色土を埋土とするＳＢ01は弥生時代ないし古墳時代の可能性があるが、周辺での採集遺物（１～３）が５世紀後半であることを考えると、古墳時代中期とみてよいであろう。建物・ピット・土坑などの生活関連遺構は、丘陵上に偏在する傾向が明瞭である。また高橋氏発掘のａ地点は谷部東側の丘陵上であるが、竪穴住居・掘立柱建物・焼土坑・ピット・溝状遺構が検出されている（観音寺市教育委員会1962）。竪穴住居は主柱穴が円形に巡り、中央ピットと配石遺構を伴っており、配石遺構から石斧が出土したという。おそらく弥生時代中期後半頃の遺構であろう。掘立柱建物は２×３間の規模のものが２棟（7.98㎡と14.0㎡）あり、周辺にもピットが分布していた。また建物の北側に直線的なプランの溝状遺構が認められたという。遺構の時期は弥生時代中期後半と古墳時代中・後期のいずれかが考えられるが、後者の可能性がより強い。また竈状の焼土坑も確認されており、周辺から「鉄粒」が出土している。この他、耳環・鉄鏃・刀子が出土しているといい、これらは古墳時代中・後期の所産であろう。

以上を総合すると、古墳時代中・後期の集落は谷部両側の丘陵上に分布していた、と捉えることが可能である。東側丘陵上にはかなり濃密な遺構分布が想定されるが、そこには弥生時代中期後半頃の遺構も一定度存在・複合している可能性が高い。一方西側丘陵上では、遺構分布は通常程度とみられる。東側・西側丘陵相互の関係は不明だが、東側丘陵に韓式系土器（軟質土器・陶質土器）の出土が集中する点が注目される。一の谷川（旧河道）との関係では、東側丘陵の方が川に向かって突出していることから、海浜部背後で河川交通などを介した対外関係の結節点（坂出市下川津遺跡などに類例）に程近い位置付けが与えられよう。東側平野部で近接した位置にある古墳時代遺跡（坂屋敷遺跡・横田遺跡）との関係も、今後の課題である。

参考文献

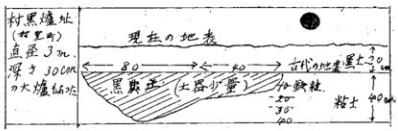
観音寺市教育委員会1962『観音寺市誌』

岩崎　孝1983「資料紹介　観音寺市村黒遺跡採集の土器」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』15号　瀬戸内海歴史民俗資料館

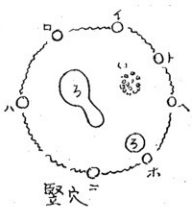
1992「村黒遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成３年度　香川県教育委員会

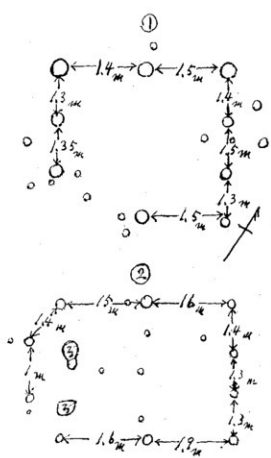
松本敏三1982「宮山窯址の須恵器」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報』第７号　瀬戸内海歴史民俗資料館

1987「香川県」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第Ⅲ分冊　埋蔵文化財研究会・(財)大阪府埋蔵文化財協会



炉（焼土坑）の断面





第10図　高橋邦彦氏の調査記録（観音寺市教育委員会1962より引用）

写真５　Ⅰ区検出遺構

写真６　Ⅰ区検出遺構

写真７　Ⅲ－①区検出遺構

写真８　Ⅲ－①区検出遺構（ＳＤ02）

写真９　Ⅲ－①区検出遺構（ＳＤ02）

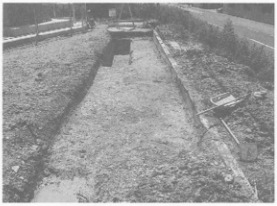


写真10　Ⅲ－②区全景

写真11　Ⅲ－②区全景

写真12　Ⅲ区北側での谷部断面（132-1番地）

第２部　積浦遺跡の発掘調査

第１章　調査に至る経緯

県道北風戸積浦線は、直島北端の風戸から島中央の本村・宮浦を経て、直島南端の積浦・琴反地に至る、島内を循環する幹線道路である。島中央部から北部にかけては、道路の新設・拡幅などの整備がかなり進んでいるが、島南端の積浦から琴反地にかけては道幅が狭く、十分な整備が行われていない状況である。このため香川県高松土木事務所では、積浦集落の背後を経て琴反地に至る道路の新設を計画し、平成13年度より埋蔵文化財の有無ならびに取り扱いについて、香川県教育委員会事務局文化行政課と協議を行ってきた。

平成14年７月には、積浦集落の西側で県道の建設工事が行われることになった。積浦集落周辺には周知の埋蔵文化財が存在しないものの、大きく湾入する海浜部の砂堆上に積浦集落が位置するため、埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性も考えられた。このため高松土木事務所と協議し、構造物設置のための床掘りが行われる時点で埋蔵文化財の有無を確認することとし、同年９月11日に立会を行った。

その結果、工区の北端において石積遺構を検出したため、文化財保護法第57条の６に基づき、高松土木事務所長から県教育長宛に遺跡の発見通知が提出された。これを受けて文化行政課では、当該地点を「積浦遺跡」と命名し発掘調査を実施した。

調査は68㎡を対象として、同年９月26～11月19日に実働５日間で行われた。９月11日の調査と合わせると実働は６日間である。不安定な天候下で行われた短期間の調査であったが、第３・４章のように多大な成果を挙げることができた。なお香川県高松土木事務所や施工業者をはじめとして、下記の方々の御教示・御協力をいただいた。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

直島町教育委員会・浜崎しのぶ・三宅篤治・大久保徹也・信里芳紀・松本和彦・乗松真也・陶山仁美・加納裕之・片桐孝浩・柏　徹哉・松田朝由・岡崎江伊子・佐々木博子・森光恵・白川智子・上原慶子・土屋実加・森澤千尋・猪木原美恵子

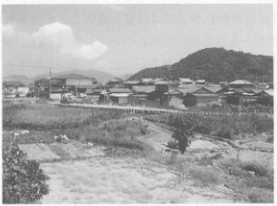


写真13　積浦遺跡全景（西から）

写真14　崇徳天皇神社から調査地を見る

第２章　遺跡の立地と環境

直島（直島本島）は香川県北端部の瀬戸内海にあり、周辺の島々とともに宇野港（岡山県玉野市）の東側を大きく遮断する、防波堤のような位置関係にある。島の規模は南北4.0㎞・東西4.2㎞であり、備讃海峡の島としては小豆島・豊島・広島に次ぐ規模をもつ。島は黒雲母花崗岩を基盤としており、島のほぼ中央部の地蔵山（標高123.3m）が最高峰であるが、他にも100m前後の山塊がほぼ全島に連なる、山がちな地形である。これら山塊部の谷間では風戸・宮浦・本村・積浦が比較的長い海岸線を伴い、集落を形成している。なお、直島ならびに直島諸島は古代には備前国に属していたとされ、中世の所属不明瞭な段階を経て近世に讃岐国に属するようになった。

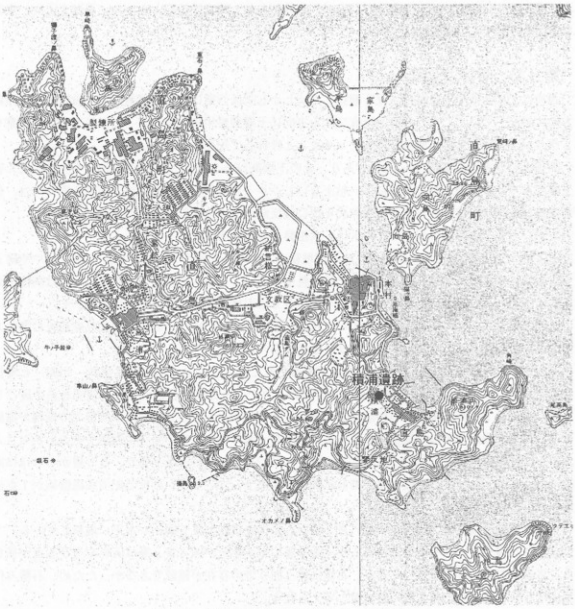
島内の遺跡分布をみると、上記した比較的広い谷部ではほとんどみられない。これは、風戸・宮浦・本村・積浦が市街地ないし大規模工場敷地であり、地表観察では遺物の散布や遺構の存在を確認するのが困難なためであろう。現状では①島南西部の小規模な谷毎の海岸に分布する縄文～古墳時代の製塩を主体とする遺跡群、②島東部・北東部の大規模な谷の周辺の丘陵上の古墳、③島東部の本村周辺丘陵上の中世山城、の３種の遺跡内容に整理できる。ただし、①が製塩関係に限定できるか否かや、現・主要集落での遺跡分布の欠如など、実態を明確にするために検討しなければならない課題は多い。

文献史料による知見は、遺跡分布とかなり対照的である。近世初頭（延宝５年：1677）の戸数は、高田浦（本村）200戸・宮浦10戸・積浦10戸・風戸浦４戸であり、現在とさほど大差ない集落規模だったようである。本村の戸数が圧倒的に多いのは、廻船の寄港地で島の中心地機能を果たしていたことに主な原因があろう。そして本村の中心地機能は、本村集落に伴う直島城（島主高原氏の居城）の存在を併せ考えると、少なくとも戦国期までは遡ると考えられる。

それ以前の中世前期の状況については明確でないが、保元元年（1156）に讃岐に配流された崇徳上皇が一時直島に滞在したことが『保元物語』『源平盛衰記』にみえる。ただし同時代の一級史料ではなく、また直島の滞在時期についても『保元物語』が京都→松山（坂出市高屋町）→直島→鼓岡（坂出市府中町）とし、『源平盛衰記』が京都→直島→松山→鼓岡とするなど、記述に混乱がみられる点で、なお史料的な検討を要するであろう。『梁塵秘抄』巻二には崇徳上皇のことが詠まれているが、そこにも松山とともに直島がみえる。小西正一氏は崇徳院伝承について、直島周辺が本州から四国に渡る中継点であることから導き出された説話の可能性もあるが、全くの架空と断ずることも難しいとしている（小西1990）。ちなみに『直嶋旧跡順覧図会』では、崇徳上皇が着岸したのは「王積浦」すなわち積浦とされている。なお積浦集落の北西丘陵上で、本調査区を見下ろす地点には崇徳上皇を祀る天皇神社があるが、これは高原氏が寛文４年(1664）に現在地に遷宮したとされる。

さて、遺跡の所在する積浦は、京ノ山（標高104.3m）から派生する標高60～80mの丘陵によって、北西側の本村から隔てられている。この丘陵と南側の姫泊山（標高101.6m）との間に、南北750m・東西400mにわたって弓なりに内弯する遠浅の海岸線が広がり、その南半は砂堆が発達している。砂堆上面の標高は、2.0～2.4m前後である。砂堆上面には全面に建物の密集する現・集落となっているが、戦前には姫泊山に接する砂堆の東側に集落の中心があったという（地元住民からの聞き取り）。積浦は昔から集落として栄え、「積浦千軒」と呼ばれていたという。砂堆背後には、１m前後の高低差を伴う後背湿地があり、現在は畑地ないし荒蕪地となっている。後背湿地には谷奥に源をもつ小河川が流れており、砂堆背後に沿って北に迂回して天皇神社下で海に繋がっている。

調査区の位置は小河川河口部北岸であり、砂堆形成の最先端にあたると考えられる。なお昭和58年に、町誌編纂事業に伴い今回の調査地点の隣接地の10㎡が試掘調査され、中世土器・陶磁器、銅銭が出土している。



第11図　積浦遺跡と直島（S＝1／25,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査区

工事工程に合わせて調査を実施したため、２分割された調査区設定となった。西側を①区、東側を②区と呼称する（第12図）。

第２節　層序と地形

当初は①区西壁で土層堆積状況を観察した。しかし①区西壁は、石積遺構ＳＸ01段階の地形傾斜方向に斜交していたため、ＳＸ01に直交する方向に土層観察用の畦を設定した。以下、①区西壁をａライン、①区ＳＸ01土層観察用畦をｂラインと呼称して記述する。

調査区の地表面は標高1.6～1.7mであり、その下標高1.0～1.3mまで現在の耕作土を主体とした表土層がみられる。表土層の下端には、粘土ないしシルトが堆積していた。地元の聞き取りでは、後背湿地部は元々水田であったが、昭和40年代に減反政策で畑作に転換したという。

したがって表土層下端の粘土・シルトは、水田耕作に伴う床土と考えられる。

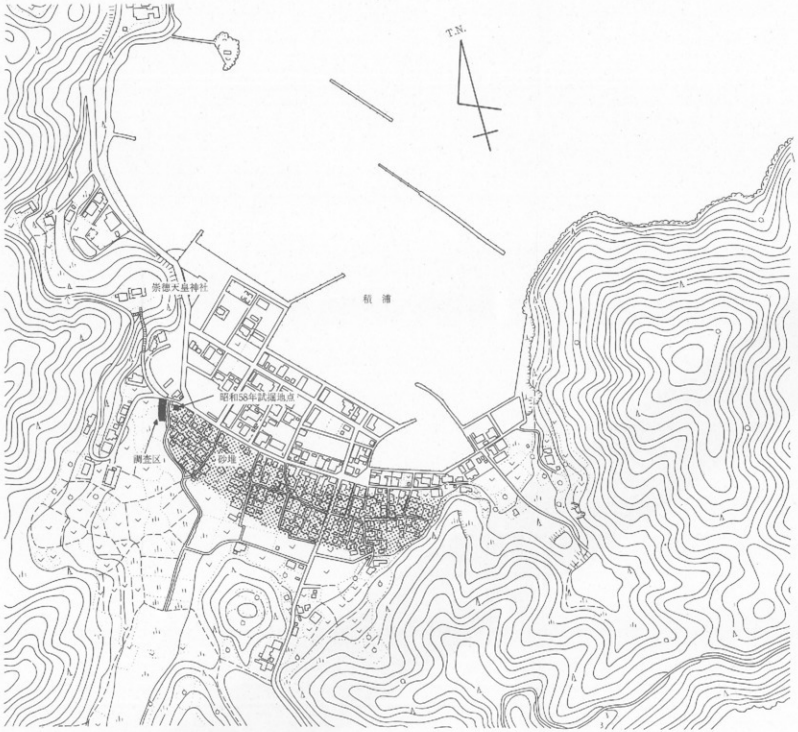
表土下には、層厚40cm前後の褐色系砂層が堆積しており、これをⅠ層とする。Ⅰ層は、やや締まった淡褐色粗砂層（Ⅰａ層）と、濁った暗褐色中砂層（Ⅰｂ層）に細別できる。Ⅰｂ層は調査区北端部に認められ、ＳＸ01がａラインに接する箇所では石積前面にまで連続している。

Ⅰｂ層に挟まれるＳＸ01石材は動いている状況が観察できたため、Ⅰｂ層はＳＸ01廃絶後に堆積したものと考えられる。なおⅠｂ層からは、近世前期の軒丸瓦が出土している。

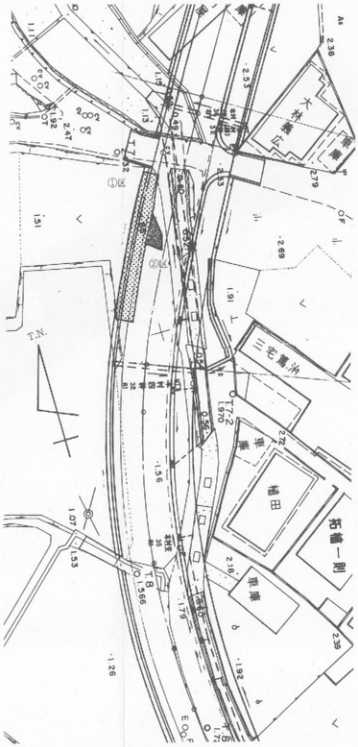
Ⅰ層の下では濁りのない褐色系中砂層が検出されたが、ＳＸ01石積前面（東側・北側）と背後（西側・南側）とでは層の形成要因の違いが認められた。ＳＸ01石積前面では、淡褐色系中砂（Ⅱａ層）とその下の暗灰褐色系の中砂（Ⅱｂ層）が堆積していた。Ⅱｂ層は滞水状態での堆積が推測され、ＳＸ01機能時の自然堆積層と捉えられる。Ⅱａ層はその上に不整合に堆積することから、人為的な埋め戻しによる可能性がある。Ⅱａ層からは12～13世紀の中世土器が、Ⅱｂ層からもほぼ同様だがⅡｂ層上位で15世紀後半頃の備前産陶器壺が出土している他、近世の肥前系磁器碗が１点出土している（未報告）。

ＳＸ01石積背後では、褐灰色中砂（Ⅲａ層）と黄褐色細砂（Ⅲｂ層）が水平に堆積している。Ⅲａ層は石積前面のⅡａ層に近似するが、Ⅱａ層の方が褐色が強くⅢａ層は灰色を帯びる点が異なる。Ⅲ層は石積間まで連続しており、石積に伴う掘り方の存在が確認できなかったため、石積み作業に平行して置かれた裏込めの整地層と考えられる。

Ⅱ層（ＳＸ01機能・廃絶時の堆積層）・Ⅲ層（ＳＸ01構築に伴う整地層）の下には、ＳＸ01構築時の基盤層をなしたⅣ層が堆積していた。Ⅳ層は灰色系の中砂（Ⅳａ層）、マンガンを多量に含みやや締まった茶褐色中砂（Ⅳｂ層）、Ⅳａ層に近似した淡灰色系中砂（Ⅳｃ層）に分けられる。ａラインでは、これらはいずれも北側に傾斜して堆積しているが、Ⅳａ層とⅣｂ層の境が平面的にはＳＸ01と同じく南北方向に延びるため、実態としては南西から北東方向への堆積方向を示すと捉えられる。ただしＳＸ01前面では、南から北にも緩やかに傾斜している状況が観察できた。Ⅳ層については、自然堆積・人為的整地の両方の可能性を考慮し、明確に判断する材料に欠けるが、その広がりが広域的であることを重視すれば自然堆積の可能性を採るのが妥当かもしれない。なおⅣ層からは、中世前半の土器が少量出土している。

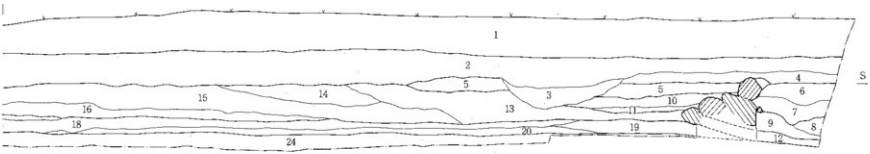


積浦遺跡周辺地形図（S＝1／10,000）

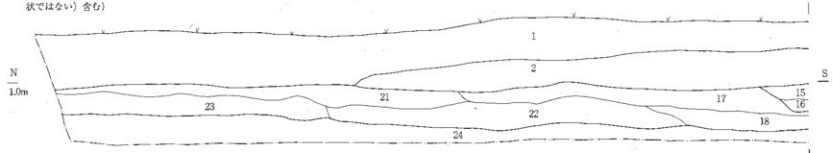


調査区位置図（S＝1／500）

第12図　積浦周辺地形図と調査区



1 灰白色シルト～砂
2 明褐色粗砂
3 褐色砂
4 淡褐灰色砂
5 明褐灰色砂
6 褐灰色砂
7 黄灰色砂（まばらにφ0.5～3.0cmの褐灰色砂ブロック含む）
8 灰色砂（まばらに暗灰色～粘土質シルト（ブロック状ではない）含む）
9 黄灰色粗砂
10 褐灰色細砂～砂（6層よりも砂粒少なく、灰色強い）
11 褐色細砂～砂（φ0.5～2.0cmの灰色細砂ブロック?含む）
12 褐灰色細砂（φ0.5～1.0cmの砂粒含む）
13 灰色砂～礫砂
14 13層より褐色強い
15 淡褐色中砂（上半にMn多く含む）
16 淡茶褐色中砂（Mn多い）
17 淡灰褐色中砂
18 淡灰白色粗～中砂
19 暗灰色粗砂（まだらに暗褐灰色粘土質シルト化、木片等若片含む）
20 暗灰褐色中砂
21 淡灰色中砂
22 淡灰色中砂
23 22よりも明るい色調
24 暗黒色粘質土（植物遺体を多量に含む）



Ⅰa層：1～4層
Ⅰb層：5層
Ⅱa層：6・7層
Ⅱb層：8・9層
Ⅲa層：10層
Ⅲb層：11層
Ⅳa層：12～14層
Ⅳb層：15層
Ⅳc層：16層
Ⅴ　層：17～23層
Ⅵa層：24層

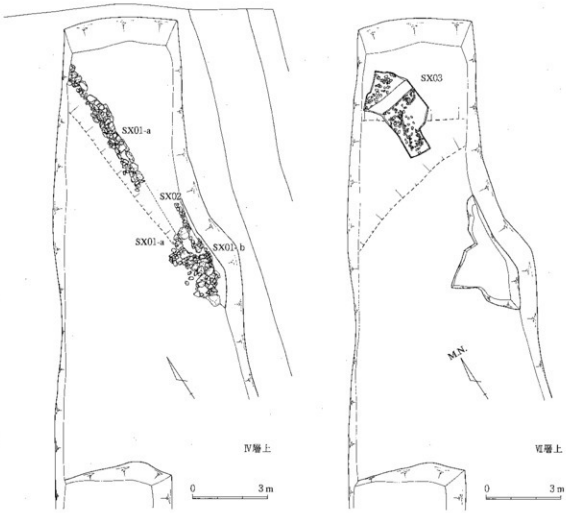
0　2 m

第13図　①区西壁土層図（aライン：S＝1／40）

Ⅳ層直下には、層厚15～20cmの淡灰白色細～中砂と暗灰褐色中砂が水平堆積していた（Ⅴ層）。Ⅴ層下面の傾斜方向はやはり北（北東）であるが、その傾斜はⅣ層に比してかなり緩やかで水平に近い。

Ⅴ層下には、植物遺体を多量に含んだ暗黒褐色粘質砂（Ⅵａ層）、その下の灰色中砂の薄層（Ⅵｂ層）がみられた。Ⅵａ層は、調査区北端（上層遺構のＳＸ01付近）では木本質泥炭状でほとんど植物遺体のみで構成されるが、調査区中央～南端にかけては間に砂層をラミナ状に含んでおり、植物遺体の混入量も少ない傾向にある。その下のⅥｂ層は、調査区北端で部分的に認められる薄層であり、下位のⅦ層を構築面とするＳＸ03礫敷き上面を被覆している。Ⅵ層からは11～12世紀前半頃の土器とともに、木鍬・木杭・加工木（板状製品）などが出土した。

Ⅵ層を除去すると、灰色砂礫層（Ⅶ層）を構築面とした礫敷き遺構ＳＸ03が検出された。Ⅶ層はＳＸ03付近のみで検出したが、Ⅳ層の傾斜方向とは逆に南西もしくは西方向に傾斜している状況が観察された。これに対応してＳＸ03上面も西側が低く、その直上のⅥｂ層も西ほど分厚くなっていた。限定された範囲の所見ではあるが、Ⅶ層段階では後背湿地ないし河口が調査区の西側にあった可能性が指摘できる。



第14図　①遺構配置図（Ｓ＝１／150）

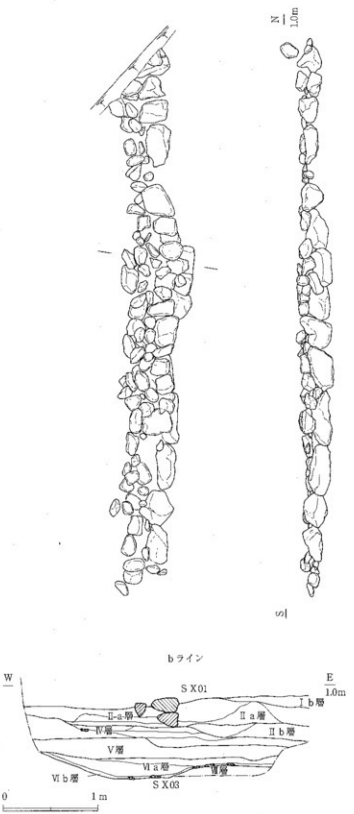
第３節 遺構

今回の調査で検出できた遺構は、石積遺構ＳＸ01と石列遺構ＳＸ02、さらに礫敷き遺構ＳＸ03の３基がある。ＳＸ01背後のⅣ層上面では遺構は検出されなかった。以下、第１節の記述と重複する部分もあるが、遺構単位の記述を行う。

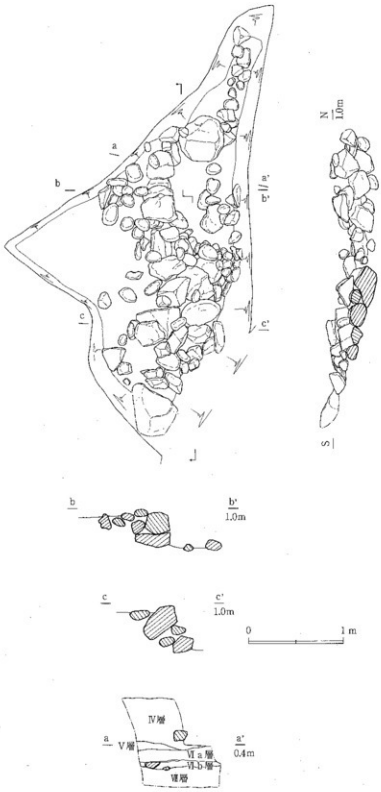
ＳＸ01（第15～17図）

①区北端部と②区で検出された。Ⅳ層を構築面としており、東側に面を揃えた状態で延長（南北）10.7mを検出した。検出した大半は石材を垂直に積むが、②区南端では石材を斜めに積んでおり、明らかに積み方が異なる。このため以下では、垂直積みの部分をＳＸ01－ａ、斜め積みの部分をＳＸ01－ｂと呼称して記述する。

［**ＳＸ01－ａ**］基底部に長径30～55cm・短径20cm前後の自然石の面を揃えて並べ、その上に20～30cm大のやや小振りな自然石を垂直に積み上げる。主軸方向は北端部でＮ－２°－Ｗ、中央部から南端部にかけてＮ－４°－Ｅである。基底石材は花崗岩割石が主体で、僅かに安山岩や花崗岩亜円礫を交えている。基底石材の置き方は、中央部から南端にかけては石材長辺で面を揃え、北端では短辺（小口）で面を揃えている。基底石材を据えたレベル（Ⅳ層上面）は、標高0.5～0.6mと一



第15図　ＳＸ01（①区部分：Ｓ＝１／40）



第16図　ＳＸ01（②区部分：Ｓ＝１／40）

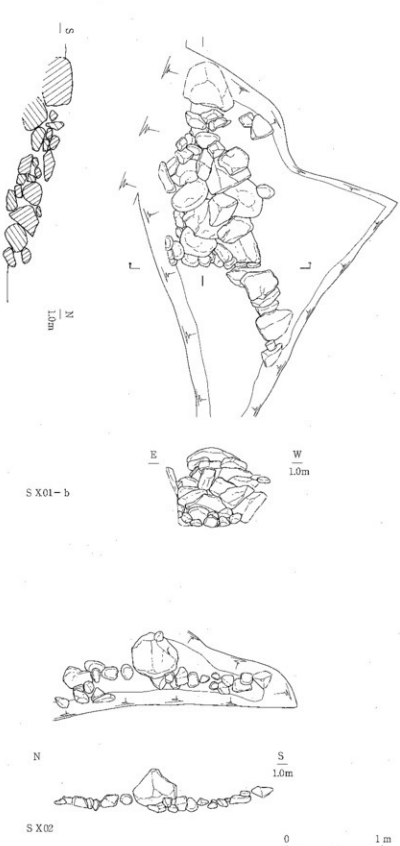
定していない。基底石上部に積まれた石材は花崗岩割石と亜円礫で、小口で面を揃える。花崗岩割石は、簡単に崩壊する風化の顕著なものが多い。検出状態では石積は２段であり、上部石材が小振りなことを考慮するならば、本来的にもさほど高い壁体構造は想定し難い。①区西壁（ａライン）部での石積は、上部石積が高いようにみえるが、これは上部石材が動いて浮いたためである（Ⅰｂ層との関係にも注意）。また石積背後（西側）には、10～20cm大の花崗岩亜円礫を用いた裏込めがあり、その中に花崗岩製の五輪塔の火輪（第21図63）が転用されていた。

なお石積背後の西側を精査したにもかかわらず、平面・断面ともに掘り方の存在が確認できなかった。ａ・ｂラインの観察では、石積裏のⅢａ・ｂ層ともに石積前面には連続しておらず、石積崩落箇所ではこの層が石積内で断絶的に途切れる状況が明確に観察できた（写真18）。Ⅲ層はＳＸ01構築に平行して盛られた整地層と考えられるので、Ⅳａ層が北東への傾斜を強める旧地形の落ち際に石材を据え、石を積みながら背後の傾斜面を整地（Ⅲ層の造成）している状況が想定される。

石積の前面に堆積していたⅡｂ層は、既述（第１節）のように滞水状態での自然堆積層と考えられる。ＳＸ01が水

域際に位置していたことを示すが、層中に貝殻等は含まれていない。

［ＳＸ01－ｂ］　ＳＸ01－ａ南端は、石積みの面がやや西に振りながら緩やかにカーブして、収束する。それより南側には、40～50㎝大の花崗岩割石と10～20㎝大の亜円礫が斜めに積まれる。また凝灰角礫岩製の五輪塔水輪が転用されている。石積みは最下段に亜円礫を並べて基底線とし、その上に花崗岩割石や大振りな亜円礫が積まれるため、積み上げられた石材前面（ないし上面）は概ね斜めに揃えられる。このため石積み上面は、14°のスロープ状の傾斜面を形成する。石積みの最奥（南端）には60㎝大の分厚い花崗岩割石があり、上面は水平で傾斜面が完結している。表層の石積みを除去すると、最奥の花崗岩はやや斜めに２段積まれた石積みの上段であることが判明した（写真24）。したがって最奥の石積みを「１期石積み」、表層の石積みを「２期石積み」と呼称する。ところで１期石積み前面からＳＸ01－ａへと連続的に延びる石材の並びが認められたが（写真23）、この並びは２期石積みと交互に積み上げられている。したがって、①ＳＸ01－ｂ・１期石積み、②ＳＸ01－ｂ・２期石積みとＳＸ01－ａ石積み、という２段階の変遷が想定される。



第17図　ＳＸ01－ｂ、ＳＸ02（Ｓ＝１／40）

ＳＸ02（第16図）　②区ＳＸ01東側（海側）のⅣ層上面で、ＳＸ01石積みと平行して延びる石列を検出した。石材は小振りな花崗岩亜円礫が主体であり、石列中に大振りな花崗岩割石が使用されており上面高が揃っていないことから、本来は石積みを伴う構造であった可能性がある。ＳＸ01石積みの補強か、ＳＸ01前面の埋没に伴い新規に施された遺構と考えられる。

ＳＸ03（第13図）　①区でＳＸ01直下のⅦ層上面を構築面とする、礫敷き遺構である。既述のように、Ⅶ層は南西ないし西方向に緩やかに傾斜しており、その傾斜面に貼り付けるようなかたちで10cm前後の安山岩の板状礫が敷き詰められている。礫は平坦面を上にしており、あたかもⅦ層上面を舗装するかのような状況であった。ただしⅦ層が西側に落ち込む箇所では、礫敷きが10cm程度の厚みを有しており、礫敷き上面の傾斜はⅦ層の凹凸を緩和しつつ、北西方向に傾斜する状況が観察できた。安山岩礫は赤色を呈するものが多く、花崗岩を基盤とする直島では採取できない石材と考えられる。

礫敷きの直上には、部分的に灰色中砂の薄層（Ⅵｂ層）を介在させて木本質の暗黒褐色粘質土（Ⅵａ層）が全面的に堆積していた。Ⅵａ層中には、竹の幹部が３本相互に絡むような状態で検出され、その周辺から木杭２本と木鍬１個が出土した。木杭は遊離した状態で出土しており、竹幹との構造的な関連は認められなかった。木鍬は、縦方向に割れたものが上下に重なる状態で出土した。これらの木・竹製品は、出土状況・層位からみて原位置を保っているとは考えられず、周囲から投棄されたものであろう。

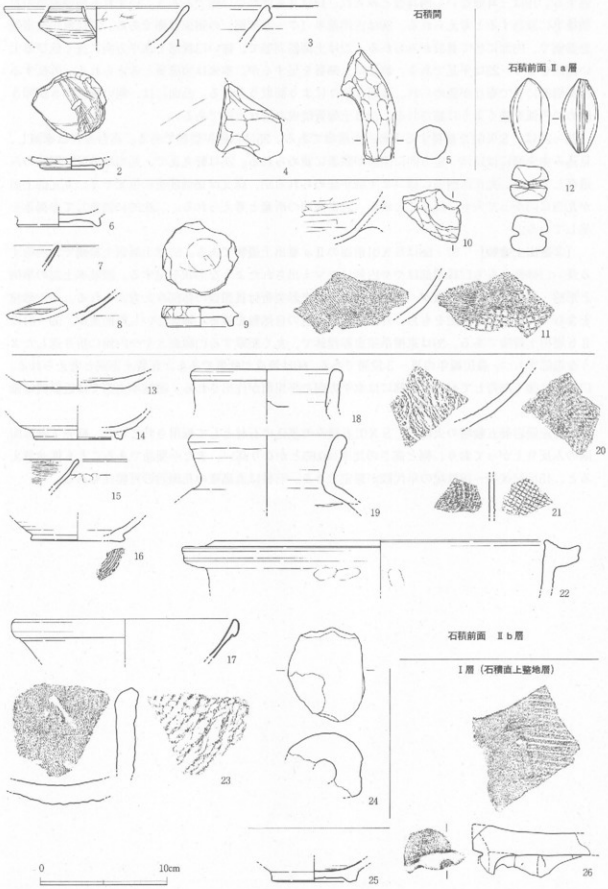
第４節　遺物

ＳＸ01関連遺物（第18・21図）　第18図１～26は①区出土、第21図57～61・63は②区出土遺物である。なお未報告だが、ＳＸ01前面のⅡｂ層からは近世の肥前系磁器碗が出土している。

［①区出土遺物］　１～５はＳＸ01石積間（裏込め石含む）出土遺物である。黒色土器椀（１）、和泉型瓦器椀（２）、東播系須恵器捏鉢（３）などの中世前半の遺物と、土師質土器足釜（４・５）のような中世後半の遺物がある。

６～12は、Ⅱａ層出土遺物である。６は土師質土器椀である。かなり摩滅しており、器面調整は明確でない。７は白磁Ⅱ－３ａ類ないしⅡ－４ａ類碗である。胎土中に鉱物粒や空隙を認める粗質な製品であり、釉は被熱して淡緑色に変色し荒れている。８は白磁Ⅳ類碗、９は白磁Ⅴ類碗である。細く高い高台をもち、高台内中央には削り残しの釉が僅かに残る。加工円盤に転用される。10は瓦質土器足釜である。器壁が薄く砂質気味の胎土をもち、鍛冶などの搬入品であろう。11は底部叩き成形の土師質土器鍋である。12は有溝土錘である。正面・側面ともに紡錘形を呈しており、特に側面を強く押さえて平坦に整えている。溝部は側面から直角方向に抉られ、彫りが深い。

13～24は、Ⅱｂ層出土遺物である。13は土師質土器杯である。やや突出気味の底部を回転ヘラ切りする。体部が著しく外傾することから、12世紀代の所産の可能性がある。14は土師質土器椀である。高台外周（底部外縁）に明瞭な段差を伴っており、おそらく底部切り離し痕とみられるが、摩滅のため断定はできない。砂粒の混入が少なく、黄褐色に発色するきめ細かな胎土をもつが、吉備系土師質土器椀とは異なる。15は尾上編年Ⅲ－１期ないしやや遡る和泉型瓦器椀である。16は東播須恵器平高台椀である。強く屈曲して窪む見込みをもつことから、森田編年Ⅰ－１段階と考えられる。17は白磁Ⅳ類碗である。18・19は備前窯産陶器壺である。18は直立する口頸部と外側に小さく巻く玉縁状口縁をもつ。器面には全体に胡麻がかかり、茶褐色に発色する。19は頸基部が締まり、外傾する口頸部と小さく肥厚する玉縁状口縁をもつ。口縁端部と肩部に胡麻がかかり、赤褐色に発



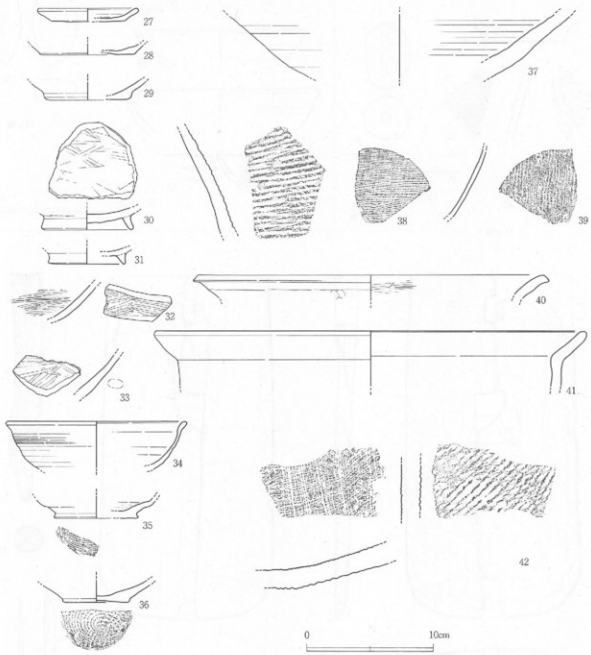
第18図　①区ＳＸ01関連出土遺物（Ｓ＝１／３）

色する。19は三耳壺ないし四耳壺とみられ、18は耳を伴わない壺であろう。いずれも間壁編年のⅣ期後半に該当すると考えられる。20は古代前半（7～8世紀）の須恵器甕である。21は亀山窯産須恵器甕で、内面に当て具痕がみられる。22は土師器羽釜で、短い口縁部と水平方向に長く延びる太い鍔部をもつ。23は平瓦である。焼成は土師質を呈するが、本来は須恵質と考えられる。外反する凹面端部にまで布目が認められ、端面は削りにより面取りされる。凸面には、粗い縄目叩きが叩き締めの円弧を描くように施される。24は土師質焼成の管状土錘である。

25・26は、ＳＸ01を被覆するⅠ層出土遺物である。25は白磁Ⅳ類碗である。高台畳付は摩滅し、見込み中央部にはほぼ一定方向に擦痕が顕著に認められる。26は軒丸瓦で、瓦当は外区と周縁のみ遺存している。丸瓦部凹面にはコビキ痕が認められるが、珠文は16個前後に復元でき、丸瓦部上面が瓦当に向かって大きく反ることから、近世前期の所産と考えられる。二次的に被熱して赤褐色を呈している。

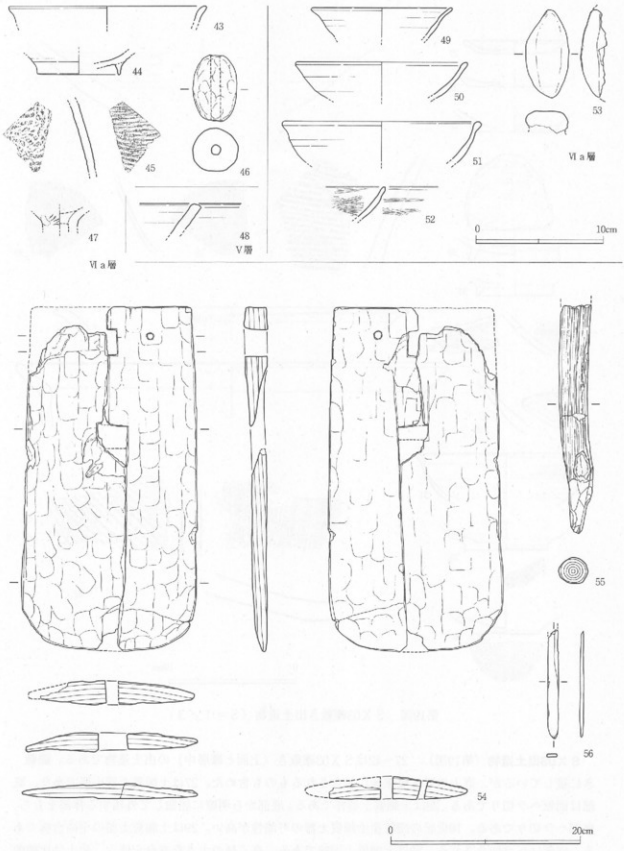
［②区出土遺物］　57・58はＳＸ01前面のⅡａ層出土遺物である。57は土師質土器鍋で、内弯する長い口縁部をもち口縁端部はやや内側にツマミ出されたような形状を呈する。讃岐本土部の事例と形態・調整・胎土の特徴が一致する。58は須恵器突帯付長頸壺の体部片と考えられる。やや砂粒を含むマーブル状の胎土をもち、外面には濃緑色の自然釉を被る。播磨ないし備前産か。59～61はⅡｂ層出土遺物である。59は東播系須恵器捏鉢で、丸く肥厚する口縁部とやや内側に折り返したような端部をもつ。森田編年のⅢ－３段階である。60は焼成が軟質であるが瓦質土器鍋と考えられる。口縁部は強く内弯しており、端部には水平方向の平坦面が作出される。讃岐本土部では近似例は確認できない。

63は花崗岩製五輪塔の火輪で、ＳＸ01石積みの裏込め石材として転用されていた。軒先下縁は四隅のみ反り上がっており、幅と高さの比率は0.65とかなり高い。また小型品であることも併せ考えると、15世紀後半～16世紀の年代観が想定できる。石材は直島産の花崗岩の可能性もある。

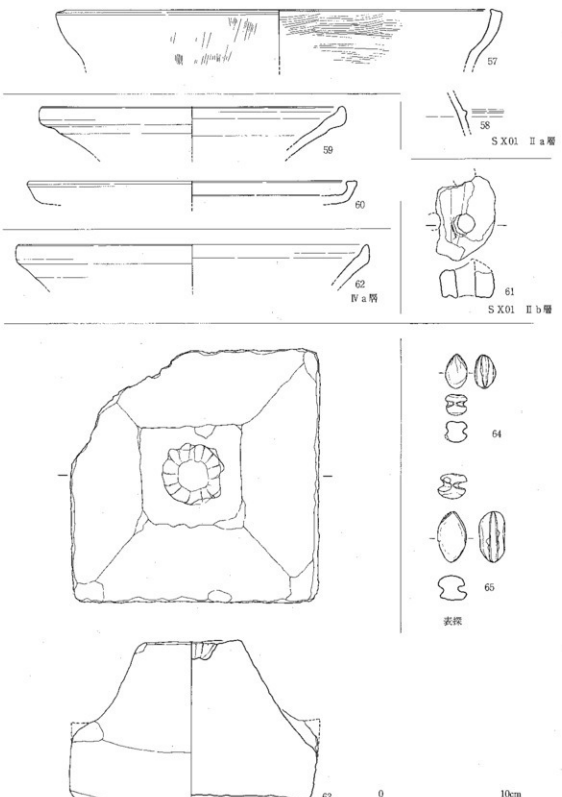


第19図　ＳＸ03礫敷き出土遺物（Ｓ＝１／３）

ＳＸ03出土遺物（第19図）　27～42はＳＸ03礫敷き（上面と礫層中）の出土遺物である。礫敷きに接しているが、直上のⅥａ層下面に包含されるものも含めた。27は土師質土器小皿であり、底部は回転ヘラ切りである。28は土師質土器杯である。底部から明瞭に屈曲して外傾する体部をもち、底部ヘラ切りである。10世紀の讃岐産土師質土器の可能性が高い。29は土師質土器の平高台椀である。底部はヘラ切りされる。30は土師質土器椀である。高く径の大きな高台を伴う。胎土は比較的緻密であるが、径２～３㎜の石英・長石粒が不整合に含まれる。高台内には切り離し痕が認められず、指頭痕がみられる。胎土がやや褐色を帯びるが、吉備系土師質土器椀の可能性があり、山本編年Ⅰ―１・２期の所産とみられる。31も吉備系土師質土器椀か。32は両黒の黒色土器Ｂ類椀である。



第20図　Ⅵa・V・Ⅳa層出土遺物（43～53はS＝1／3、54～56はS＝1／4）



第21図　②ＳＸ01関連出土遺物、表彩遺物（Ｓ＝１／３）

外面には緻密な分割磨きが施されており、内面もおそらく分割磨きと考えられる。生産地は不明だが、11世紀代の所産とみて大過ないであろう。33は尾上編年Ⅱ期とみられる和泉型瓦器椀である。34～36は須恵器平高台椀である。34は顕著に外反する口縁部をもち、口縁直下外面には凹凸の激しい沈線状のロクロ目が潰されている。胎土は緻密・硬質で淡灰色に発色し、口縁部付近に胡麻状の降灰が認められる。おそらく東播系須恵器ではなく、相生窯などの西播系の須恵器と考えられる。35・36は砂粒を多く含み灰色に発色することから、東播系須恵器と考えられる。35は明瞭な円盤状の平高台を伴い、見込みは落ち込むように窪む。森田編年Ⅰ－1段階の所産であろう。36も見込み中央は窪むが、平高台は低く平底状を呈することから、森田編年Ⅰ－2段階とみられる。37は須恵器鉢である。瓦質焼成で、器面に炭素が吸着する。胎土は比較的きめ細かであるが、石英粒や黒色粒を含んでおり、十瓶山窯産の可能性がある。内面下半でロクロ目の盛り上がった部分は摩滅しており、使用痕とみられる。38は十瓶山窯産とみられる須恵器甕である。外面にやや粗い平行叩き目が施され、器面に炭素の吸着する瓦質焼成である。39・40は吉備系土師質土器鍋である。40は口縁端部を水平方向に弱くツマミ出すことから、山本編年Ⅲ期の所産とみられる。41は土師器甕である。大粒の砂粒を多量に含む粗質な胎土をもつ。42は須恵質平瓦である。凹面の布目は極めて粗い。

43～47・54～56は、ＳＸ03を被覆するⅥａ層（泥炭土）の出土遺物である。43は東播系とみられる須恵器椀である。44は吉備系土師質土器椀で、細長く高い高台をもつもののヘラ磨きされないため、山本編年Ⅱ期ないしⅢ－1期とみられる。45は古代前期（7～8世紀）の須恵器甕である。46は管状土錘であり、外径に比してかなり小さな孔径である。47は製塩土器である。底部から脚台にかけての破片で、底部外面には左下がりの平行叩き目が施される。内面は、脚台内側に充填された底部が剥離して擬口縁状を呈する。また胎土中には角閃石が多量に含まれる。大久保編年の備讃Ⅲ式（弥生後期終末～古墳前期初頭）にあたり、周辺での製塩活動を示唆するが、摩滅が顕著であり直近か否かは推測が難しい。54～56は木製品である。54は鍬である。柄の装着穴と泥除けの装着穴が縦方向に並び、泥除け装着穴の片側にも円孔が認められる。先端は柄側の面がやや摩滅するが、刃先を装着

遺構	土師質土器						黒色土器		土師器		吉備系		東播系			瓦器	備前		十瓶山		亀山	白磁	その他	合計
	杯	小皿	椀	鍋	足釜	不明	A椀	B椀	釜	羽釜	椀	鍋	椀	捏鉢	甕	椀	壷	甕	捏鉢	甕	甕	椀		
Ⅰ層	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	土錘1・軒丸瓦1	
Ⅱａ層	0	0	11	2	0	2	0	0	2	0	1	1	2	0	1	3	0	0	0	0	0	3	中世須恵器甕1,瓦質足釜,土錘1,古代須恵器突帯瓶1·甕1,弥生甕1	
Ⅱｂ層	3	0	6	0	0	9	1	0	2	1	1	0	2	1	0	7	2	0	0	0	1	1	瓦質鍋2,古代須恵器壷1·甕2,丸瓦1,肥前系磁器碗1,土錘2,平瓦1	
ＳＸ01石槨	0	0	2	1	2	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	2	1	0	0	0	0	0		
Ⅲ層	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
Ⅳ層	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	古代須恵器杯1	
Ⅵａ層	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	古代須恵器甕1,土錘1,製塩土器1	
ＳＸ03礫敷	7	1	4	0	0	0	1	2	2	0	4	2	2	0	0	2	0	0	1	1	0	0	古代須恵器甕1,平瓦1,須恵器椀(西播?)	
合計	10	1	25	4	2	12	3	2	7	1	7	3	10	3	1	15	3	1	1	1	1	5	26	145
比率	0.07	0.01	0.18	0.03	0.01	0.08	0.02	0.01	0.05	0.01	0.05	0.02	0.07	0.02	0.01	0.1	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.03	0.18	

第1表　土器組成表

した明瞭な痕跡はみられない。55は杭である。56は板状に加工された木製品で、先端（図示した下側）が炭化している。

Ⅴ層・Ⅳａ層出土遺物（第20図）　ＳＸ03廃絶後からＳＸ01構築直前までの堆積層から出土した遺物である。出土量は相対的に少ない。

48はⅤ層出土の東播系須恵器捏鉢である。体部に直交して外傾する口縁部端面をもつ。森田編年Ⅰ－１期の所産であろう。

49～53・62はⅣａ層出土である。49は土師質土器杯である。外反する口縁部をもち、体部内面にはロクロ目が明瞭である。全体に器壁が薄く、口径も11cm前後と小振りである点が特徴だが、備前本土や塩飽諸島ではこのような小口径の杯は認めることはできない。一方、胎土・色調も含めて讃岐本土での類例は多く、佐藤編年中世Ⅱ－３・４期に位置付け得る。50・51は吉備系土師質土器椀で、51は細片のため口径復元に難点はあるが、いずれもヘラ磨きされておらず、山本編年Ⅱ期ないしⅢ－１期で捉えられよう。52は和泉型瓦器椀で、内外面に比較的密なヘラ磨きを施すことから、尾上編年Ⅱ－１・２期と考えられる。53は有溝土錘である。側面の溝部で半折しているが、側面を強く押さえつけて面を形成している状況は観察できる。62は森田編年Ⅱ－２段階の東播系須恵器捏鉢である。

表採遺物（第21図）　調査区の旧土地所有者である浜崎氏が、耕作の際に採集されていた遺物である。57・58ともに有溝土錘である。大きさは出土資料（12・13）よりもかなり小振りであるが、側面を押さえて面を作ることや縄を掛ける側面の抉りが幅狭で深い点は共通する。

写真15　①区全景（東から）

写真16　②区全景（北から）

第4章　まとめ

第1節　遺構の時期・形成過程

今回の調査では、Ⅶ層を構築面とする礫敷き遺構ＳＸ03と、Ⅳ層を構築面とする石積遺構ＳＸ01・石列遺構ＳＸ02の3基の遺構を検出することができた。ＳＸ03は大半の伴出遺物が11世紀後半～12世紀前半の幅で捉えられ、一部に10世紀代（28）、12世紀後半以降（39・40）が含まれる。遺構の時期を最新の遺物で捉えるならば、12世紀後半～13世紀代ということになるが、Ⅶ層が遺物を含まない砂礫層であることを考慮すると、ＳＸ03に先行した遺構形成や遺物廃棄が行われる環境にあったとはいい難い。また10世紀代の28は摩滅するが、11～12世紀の遺物は器面の残りが良好で直近からの投棄が想定される。したがって、ＳＸ03は11世紀後半には構築され、13世紀代をもって廃絶したと捉えるのが妥当であろう。ＳＸ03廃絶後の堆積層であるⅣａ層に13世紀前葉～中葉の49や50・51が存在しており、層位関係の点でも矛盾はない。

ＳＸ03の上位に構築されたＳＸ01・02は、遺構の重複状況や配置から、①ＳＸ01－ｂ・1期石積み、②ＳＸ01－ｂ・2期石積み＋ＳＸ01－ａ、③ＳＸ02、という3段階の変遷が考えられる。その構築年代を示すものとしては、ＳＸ01－ａ裏込め石材に転用されていた五輪塔火輪63が15世紀後半～16世紀に位置付けられる。一方、ＳＸ01石積前面に堆積したⅡｂ層出土遺物をみると、12～13世紀の土器を主体とするが、備前壺18・19が間壁編年Ⅳ期後半（15世紀後半頃）と考えられる。また、石積の間から出土した土師質土器足釜４・５の年代決定は困難であるが、14～16世紀中葉の幅で捉えて大過ない。土器・陶器と五輪塔との矛盾ない年代観を考えるとすれば、ＳＸ01－ａの年代は15世紀後半～16世紀の幅で捉えるのが妥当であろう。ただしⅡｂ層から肥前系磁器碗が出土しており、これが混入でなければ最終埋没が18世紀頃まで下る可能性も残される。

ＳＸ03廃絶からＳＸ01構築にいたる時間幅については、限られた調査範囲では不明である。ＳＸ03は全体が泥炭土（Ⅵａ層）で覆われており、通常の分解の限度を超えて多量の植物遺体が供給されたことを示しているが、層中には砂層が介在しないため、静穏な環境下での堆積が推測される。その上に堆積した砂層（Ⅴ層）には、一部にラミナ状堆積がみられ起伏が激しいことから、急激な流水による堆積が考えられる。おそらくＳＸ03は、最終段階では淀んだ後背湿地状の環境になり、それが流水（洪水？）で一気にパックされたことで廃絶したのであろう。

これに伴い、砂堆を横断する河道の位置も変化して、現在と大差ない景観になったと思われる。その後、この新たな地形環境に沿うかたちでⅣ層の堆積が進むが、これは現在の小河川左岸での新たな砂堆の形成を示しているとみられる。Ⅳ層の形成は短期間で進んだとは見なし難いことから、ＳＸ03廃絶からＳＸ01の構築までは若干の断絶を想定した方がよいであろう。ただし、これが後述するような積浦の港湾施設の断絶を示すか否かは、より広域的な調査データの蓄積を待った上で検討するべき課題であり、今回の成果だけでは判断できない。

なおＳＸ03構築に先行する、Ⅶ層の堆積状況についても、今後の調査データの蓄積を必要とする課題である。Ⅶ層が粒径の粗い砂礫層であることは、周辺の基盤をなす花崗岩風化土壌が急激に供給されたことを示しており、古代末の急激な地形環境の変化（平野部での完新世段丘Ⅱ面と海浜部での三角州形成）に連動する可能性もある。しかし積浦では河川の流域面積が狭く、讃岐本土と同様な現象が生じるのか、問題である。直島では弥生時代～古墳時代に製塩業が盛んであり、それに伴う山野の荒廃がこのような堆積を招いた可能性もある。いずれにしても広域な土層把握と、伴出遺物にもとづく層の形成年代の検討から、地形環境の変化を辿る作業の継続が必要である。

第２節　遺構の構造

今回の調査区が、大局的には砂堆を分断する小河川の河口、ないしその周辺の砂堆汀線に位置することは確実である。検出された遺構は、前節でまとめたような頻繁な地形の変化にもかかわらず、その地形の傾斜面を利用して構築されている。一方調査区内では、建物・井戸などの生活関連遺構は検出されておらず、ＳＸ01～03が通常の生活関連施設とは異質な施設であることを窺わせる。

このような汀線付近の傾斜面に構築された中世の石積・礫敷き遺構は、近年その類例を少しずつ増加させている。香川県高松城跡（西の丸町Ｂ・Ｃ地区：12世紀前半～13世紀前半）・青森県十三湊遺跡第121次調査（15世紀前半）・福岡県博多遺跡群第89次調査（16世紀）・佐賀県徳蔵谷遺跡（13世紀前半～15世紀前半）などが該当する事例であり、香川県綾歌郡宇多津町伊勢町遺跡で工事中に発見された「石垣」（13世紀後半～14世紀初頭）もこれに該当する事例の可能性がある。この他、河川に伴う遺構として、香川県白鳥町白鳥廃寺護岸遺構（古代～中世）などがある。これらに共通する構造は、自然地形斜面を利用してそこに石材を「積む」のではなく、「貼り付ける」ようにして構築されている、という点である。またいずれも立地から、港の一部ないし直近と見なせる位置にある。十三湊では、砂浜での足場を固めるためのじぎょう地形と考えられ、付近が荷揚げ場であった可能性が指摘されている。

15世紀後半～16世紀のＳＸ01は、垂直で直線的な石積みのＳＸ01－ａと、斜めに石積みを施すＳＸ01－ｂから構成される。ＳＸ01－ａは、汀線斜面の護岸と考えてよいであろう。ＳＸ01－ｂでは、大振りな護岸的な石積み（１期石積み）の前面に、礫面を揃えてスロープ状にした石積み（２期石積み）を造成している。護岸施設を芯にしたスロープ状の石積みは、博多遺跡群第89次でも確認されており（ただし博多は杭と板による護岸）、時期も近接することから港湾関連施設の一形態を示すものと考えられる。

11世紀後半構築のＳＸ03には、①赤色に発色する安山岩の扁平礫を用い、②礫の平坦面を上にして地形面に貼り付けるように敷き、③一部では敷く厚さを調節して礫敷き上面の凹凸を整える、という特徴が認められる。高松城跡（西の丸町地区）Ｂ・Ｃ地区で検出された下層遺構ＳＸｂ16・ＳＸｃ49ほか（11世紀後半～12世紀前半、12世紀中葉～13世紀前半）は上記①・②の特徴を共有しており、基本的な構造についてはＳＸ02と同一と見なし得る。高松城跡下層遺構ではその他に、④傾斜面背後の平坦な砂堆上面にも礫敷きを施すことや、また⑤礫敷き下端に杭と横木からなる船蔵状遺構を伴うことが特徴として挙げられ、木製碇が出土したことと併せて、港湾施設（船着き場）に関連する遺構群と評価できる。礫敷き自体の機能については汀線護岸の可能性もあるが、②の特徴では汀線の流出を防ぐことは困難で、別の機能に主眼が置かれたものとみられる。十三湊遺跡の事例（15世紀）ではやや疎らながら特徴②が認められるが、礫敷きの前面（海側）に杭と横木からなる「護岸施設」が検出されており、礫敷きの機能としては荷揚げ作業を容易に行うための地形（舗装）と考えられている。特徴③や高松城跡下層での特徴④は、この想定と整合する要素といえよう。

ところで積浦遺跡・高松城下層では、安山岩礫を遺跡内で入手することは不可能であり、明らかに周辺地域より石材を調達しているといえる。高松城下層では南約２kmの石清尾山が産地と考えられるが、積浦遺跡では島外からの搬入が考えられ、しかも赤色を呈する石材であることから高松城下層と同一産地である可能性もある。いわば両遺跡で共通した仕様の施設が同時期に構築されていることになり、地域性の問題が浮上してくる。

第3節　中世土器の様相

遺物の出土量が少ないため、層位・遺構毎の数量的把握が実態を反映するかどうかは、かなり問題がある。このため、伴出した層位・遺構は度外視して、主に中世前期（11世紀後半～13世紀）の土器・陶磁器について概略的な検討を行う。

生産地別では、東播系須恵器（10%）・和泉型瓦器椀（10%）・吉備系土師質土器（7%）が目立ち、この他に産地が明確でない土師質土器が48%存在する。これらの土師質土器のうち、18%を占める椀には吉備系が相当量存在する可能性があるが、典型的な胎土の事例でなければ判別が困難であり、実態としては椀を中心に吉備系の比率がより高くなると思われる。この他、少量ながら注目される土器として、畿内から搬入された可能性がある瓦質土器足釜（10）・鍋（60）、西播を含めた播磨からの搬入が想定される須恵器椀（34）・突帯付瓶（58）、讃岐本土産の可能性をもつ土師質土器杯（49）・鍋（57）などがある。輸入磁器には白磁が3%認められるが、これがが多いとみるか一般的な状況とみるかは判断が難しい。これらは吉備系土師質土器も含め、積浦遺跡出土土器・陶磁器は島外からの搬入品を主体とするようである。

供膳器種の時期的な傾向としては、11世紀後半～12世紀前半に東播系須恵器、12世紀前半～13世紀に和泉型瓦器がみられ、この両時期を通じて吉備系土師質土器が存在するようである。特に注意される傾向を整理すると、①吉備系土師質土器の継続的な搬入と、より遠隔地の製品（東播系須恵器・和泉型瓦器）の消長的な定量搬入傾向、②希薄な讃岐本土産土器の搬入状況、の2点がある。

近接する塩飽諸島（櫃石島・羽佐島・与島）での様相は、①全般的に吉備系土師質土器椀主体で、和泉型瓦器椀や輸入磁器もかなり目立つこと、②讃岐本土産製品（土師質土器・須恵器）が少量の櫃石島・羽佐島と、③讃岐本土製品が定量認められる与島の2者に分けられること、に整理できる。資料数が少ないがあえて比較すると、積浦遺跡は大枠としては①・②を特徴とする櫃石島（大浦浜遺跡）・羽佐島に近いといえる。ただし積浦遺跡の方が輸入磁器の量が若干低調にみえること、また東播系須恵器椀が目立つことなどの差異も指摘できる。これが各島の地理的位置に起因するものなのか、あるいはそれとは別次元の流通構造を反映するものなのかについては、積浦遺跡での今後の資料の増加を待って検討したい。

写真17　②区SX01（北東から）

写真18　②区SX01 前面土層（北東から）

写真19　①区SX01（南東から）

写真20　②区SX01・02（北東から）

写真21　②区SX01（北東から）

写真22　②区SX01（東から）

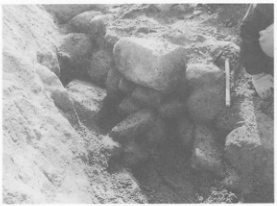


写真23　②区SX01－a・b石積み状況（北東から）

写真24　②区SX01－b・1期石積（北から）

写真25　SX03 検出状況（東から）

写真26　SX03 礫敷き（東から）

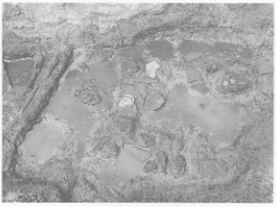


写真27　SX03 遺物出土状況（南から）

写真28　出土遺物

写真29　出土遺物

写真30　出土遺物

写真31　出土遺物

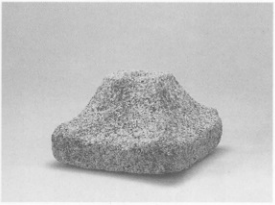


写真32　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	けんどうかんけいまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく
書名	県道関係埋蔵文化財発掘調査報告
副書名	村黒遺跡・積浦遺跡
巻次	平成14年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐藤竜馬
編集機関	香川県教育委員会
所在地	〒760-8582　香川県高松市天神前6番1号天神前分庁舎　電話 087−832−3784〜3787
発行機関名	香川県教育委員会
発行年月日	西暦2003年3月31日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
46頁	6頁	37頁	0.5頁	3頁	32枚	21枚	0枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
むらくろいせき 村黒遺跡	香川県観音寺市流岡町 129−3番地ほか			34° 07′ 49″	133° 40′ 40″	1992.1.29〜1.31 1992.9.28〜9.30 2002.4.30〜5.13	450m²	県道黒渕本大線 地方特定道路整 備事業
つむうらいせき 積浦遺跡	香川県香川郡直島町			34° 27′ 07″	133° 59′ 58″	2002.9.26〜11.19	68m²	県道北風戸積浦 線離島道路特殊 改良第一種事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
村黒遺跡	集落跡	古墳時代・古代	掘立柱建物・柱穴・土坑・溝状遺構・落ち込み状遺構	土師器・須恵器 輸入磁器	
積浦遺跡	港湾関連遺跡	中世	石積遺構・石列遺構・礫敷き遺構	瓦器・須恵器（東播系・亀山窯産）・土師質土器（讃岐本土産・吉備系）・輸入磁器・焼締陶器（備前）・土錘・五輪塔（火輪）・木製品	港湾施設（船着き場）

県道関係埋蔵文化財発掘調査報告

村黒遺跡・積浦遺跡

平成15年３月31日

発行　香川県教育委員会
　　香川県高松市天神前６番１号天神前分庁舎
印刷　エコ・プリンティング協同組合